

『銀のまちをつくった人たちの話』

制作秘話



NPO 法人緑と水の連絡会

>間もなく一冊の本『銀のまちをつくった人々』が完成しますが、まず、もっさん（本宮）の今の率直な感想は？

僕、そんな思い入れがないんです。形になった時は嬉しかったんですけど、そんなにこの本に愛着があるかって言ったらそうでもない。だから今日も、大森行ったときに、「あの本の…」とか言われたんですけど、「あ、そう言えば作ったわ」みたいな感じで。

>向かっていた先はこの本を作ることでなかったということ？

取材した先の人が「自分の話を表に出してくれてありがとう」という期待をどっかに持っていてくれるんだろうなという、それだけが僕のモチベーションだったんです。あとは、その人に会って話ができて「こういう人もいるんだ」という僕の経験が得られるということです。だから、あまり本を作るところに焦点は向いていなかったような気がしますね。

>できあがった書籍を見ると、「ふるさとの財産」のひとつができたって外の人間からでも感じますが。

これができることで、大森だけでなく大田市の人が、地域を再評価する。自分たちの財産とか地域を再評価することができる。簡単に言えば「案外いいじゃん」というのがひとつのねらいだったし、またこれを外の人が見て評価するというのもひとつのねらいだったんです。確かに、財産と言えば財産ですよ。

>内部からの評価と外部からの評価では、編集者本人としてどちらに重きを？

やはり内部なんです。松葉登美さんと中村俊郎さん以外は、正直言って「この人だれ？」なんです。「この人だれ？」っていう人たちの、あまり知られていない話を聞いてくるのが、聞き書きのいいところ。

>世の中であまり知られていない人たちにスポットをあてる意味は？

世の中で価値があると思われるものは、結構遠い世界のものだと思うんです。例えばテレビの中で、こんなアイスが美味しいとかこんな便利な文房具がありますとか。海外に行っているスポーツ選手が凄いとか、それを見たからと言って僕らの生活が充実するかどうかと、本質的にはそうではない。

足元にあるものに目を向けるひとつのキッカケとしてやっているのが、ふつうの人に話を聞く「聞き書き」です。完成した本を見て、本人たちは「案外自分たちの生活はいいんじゃないかな」とまず思う。それを見た人たちが、自分たちをこの人たちの立場に置き換えることもできるかもしれないし、そうしたら自分の身近な生活とか、手元にあるものに価値を見出せるのではないかと思います。

>改めて、この本が作られたキッカケは？

東京にいた時に僕は父親と確執があって…。でも、父親をないがしろにして先に進めないなあと思って喰らいついて話をしていたんです。お父さんは自分の話を喋らない人なんで

すね。すると家系図みたいなものを書いてくれた。うちの父親は、お父さんとお母さんが早くに亡くなっているんです。そのふたりが居れば父親の話が聞けるんだけど、居ないから、じゃあそれに代わる人は誰だ、と。昔お世話になっていたお婆さんが千葉県にいて、「ちょっとその人に連絡とって」と父親に頼むと、すぐに喜んで電話をかけてくれて。「僕はお父さんのことをあまり知らないから、昔のお父さんのことを聞きたい」と言って、千葉県に一人で行きました。すると、うちの父親の話じゃなくてお婆さんの自分の苦労話をバーっと話してくれて。息子と娘を育てるためにオニギリ屋を始めようと思った、って。じゃあ、オニギリ屋を始めるためには何をしたらいいかと考えて、他のオニギリ屋に忍び込んで修業をしたとか。そんな話を聞いてイメージしていると、別世界ですね。

で、肝心なうちのお父さんのことは？と聞いたら「お父さんは、昔は優しい子だったよ」って。その「優しい」って言葉を聞いて「ああ…！」と思って。僕もよく優しいって言われるわって。僕とお父さんはやっぱり親子だって。「優しい」って気が弱いとかそういう風に悪くとらえていたけど、自分は自分でいいんだって思って安心したんですね。

東京にいとあまりルーツに触れる機会ってないです。案外お婆さんの話って面白いなって。最初は怪訝そうな顔をしていたのに、「入りにさいや」って。ご飯も食べさせてくれて、結局5、6時間話を聞いて、僕も勝手にメモをとって。家を後にする時も、また来なさいやーって言われて嬉しくて。

「自由大学」(一注)ってコミュニティがあって、そこでみんなで起業のアイデアを出し合



った時に「おじいさんおばあさんの話を聞くのって面白いと思うんです、お金になるか分からないけど」って僕が言った時、「それ既にやってるよ、聞き書きってのがあるんだよ」って。「へー、聞き書き」って思っていたら、この大田市の「田舎で働き隊！(NPO法人緑と水の連絡会)」の募集に「聞き書き」って書いてあって、和田さん(事務局長)に「聞き書きに興味があります」って言うと「そんなこと言う若い子は滅多にいない、君みたいな人に来てほしい」って言われて。それがきっかけで、この本の製作にも関わるようになりました。

会社を辞めて1年半ぐらいフリーターやっていたころ、自分のやりたいことがよく分からないけど、田舎に住みたいとか、語学がしたいとか、本を作りたいとか色々あって、そろそろ何かやらなきゃって思って。田舎暮らしはおじちゃん、おばあちゃんになってか

らでいいじゃんって感じだったのですが、どうせだったらすぐ始めちゃえばって、ここに行きついたと思うんですね。それで1年目に、この大田市の聞き書きの本(『明日に伝える暮らしの記憶』2011年刊)ができました。

>その1冊目から2冊目への経緯は？

1冊目の出版パーティをやったんですよ。話し手のおじいちゃんおばあちゃんと、聞き手の若い人たちと、地域で協力してくれた人たちが来てくれました。その本に出てくる石賀末太郎さんっていう大森町の90何歳のおじいさんがいるんですけど。その人のお話はちゃんと知っている人じゃないと校正できないような深い内容だったんです。その校正をお願いしたのが、今回2冊目に出てくる吉岡さんだったんです。で、吉岡さんに原稿の確認で協力してもらったこともあって出版パーティに招待したら、喜んで来てくれて、「自分もそういう話ができるぞ」ってオーラが凄い出てるって和田さんや高橋理事長が言っていて、僕も感じていなくはなかった。何とかあれを汲み取ってあげたいというのがこの本の一番最初の発端。「自分だって」っていうおじいさんおばあさんが出てくるであろうとは、実は1冊目を作りながら感じてました。そこが繋がりでですね。

>半年以上、1年近くかけての編集作業だったと聞きますが、モチベーションは維持できましたか？葛藤はありませんでしたか？

ありましたね。正直、1年目終わった時に東京に帰りたくなくてこれからどうしようと思

って。大田を離れてどこかっていう場所もないし。

石賀末太郎さんの聞き書きをやったのが世界遺産専攻の本間悠子さん(筑波大)で、実際動けるのは本宮君がいる。じゃあこの2人が中心となって石見銀山の本をつくれるじゃないかという企画で、世界遺産登録前までの史跡保護活動を記録した「プロジェクト X」のような本にしたいというような話が、和田さんからあったんですけど、僕と本間さんはその話を聞いた時は「どうなんだ??」と。聞き書きじゃなくて記録集を作るというニュアンスだったから、本間さんからも「もっちゃん、記録集なんて作りたくなかったら断わった方がいいよ」って言われて迷いもあって。そんな矢先に、それを実現できる事業が見つかったって、和田さんからいきなり電話があって「こういう話あるけど、進めちゃっていいよな?どうなんだ?」って。すぐに返事を出さないといけなかったみたいで僕は「はい」って言うしかなくて、結局話が進んだけど、僕は腑に落ちない。一体何を作るんだ、記録をとるなら別に僕じゃなくてもいいじゃんって。聞き書きじゃないでしょ、若い人がやらなくても誰でもいいんじゃないって。必要とされている感がなかった。だからモチベーションはすごく低かったですよね。何でやらなきゃいけないのか、でも生活しなきゃいけないし、そういう葛藤。

最初は本間さんと僕だったんですが、途中から富田君、波多野君、ナッタボンさんが加わり、角さん(島根県教育庁文化財課)もスタッフみたいな立場で加わり、和田さんは援助するみたいな立場で。リーダーは僕だ…ここが問題なんですよ。物事を決めてマネーজে

ントはすべてリーダーがするというリーダー像は、僕は正直、嫌だったんです。でも、ここではそういうリーダーを求められていて、編集会議で、みんながワーワー話をして、「で、どうするのモッチャン。やるの？やらないの？」っていう空気があって苦しかった。僕は別に石見銀山に興味ないもん。

でも、僕は人の期待に応えられる自信もあって。それは和田さんの期待とかじゃなくて、インタビューした先の人々が期待をしてくれて、自分が出会いを楽しめれば、インタビューしている間にモチベーションが上がってくるかもしれないです、ってその時点で既に和田さんには言ってあったんです。

>その葛藤はいつまで？ 今も？

今はないです。もう終わってしまったし。

(2011年)8月、9月と、いろいろなお年寄りに取材しているうちに、昔の大森の姿のポイントが段々頭の中に入ってきているのがわかってきたんですよ。編集会議で付箋紙ワークショップをして、テープ起こしから拾った言葉の中で「これは何だ？」という言葉が結構あって、それを知っているのは話を聞いた僕しかなくて、「あ、やったぜ」って。そこでようやく「この時代のことは記録されていないんだ」っていうのをリアルに感じられたっていうこと。でもそれは100のモチベーションのうちの50か60くらい。もっとモチベーションを上げてくれたのは、その後の本編の7人の人たちに話を聞きに行った時に、みんなが口をそろえて「何度でもインタビューにおいで」「いつでもいらっしゃい」って言ってくれたのが嬉しいなって。

>その「嬉しいな」っていうのは？

協力しようとしてくれているのに、僕が頑張らなくてどうするという感じだったのでは。だって優しいですよ、何度でもおいでっていうのは。だってみんな僕が何も知らないことをわかっているんですよ。だからかな、嬉しかったんですよ。結局若い人が行くだけで「あんた知らんだろ」って。そういうことなんです。だから「僕、聞きます」って耳を傾けさえすれば、向こうは「教えてあげようじゃないか」となるわけです。

>聞く段階でも、文字にする段階でも、聞き手として工夫してきたことは？。

聞く段階での工夫は、まず製作期間・時間とかを考えて、編集を考えた上で筋道を立ててから取材に行かなきゃねって、ミーティングで言われて・・・。ナッタポン（東京大学）さんはそれができていたんですよ。モッチャンもやろうよって言われても、僕はあくまでも聞き書きをやってきた人間で、聞き書きのポリシーが好きなんです。ナッタポンさんのインタビューを聞いていると、ナッタポンさんは答えを予想しているんです。言われたことに対してまた返すという、先読みをどんどんしている。僕はそういうインタビューには言わせている感があって意味ないじゃんって思う。

ナッタポンさんは、証言を記録することが彼の仕事だったので、そういうインタビューをしなきゃいけないからやっているけど、それと同じことをしてしまっただけは誘導なんです。

それでは実際の姿は聞き取れないだろうと僕は思っていて、聞き書きのスタンスは変えない。だけでも予備知識をちゃんと持っているだけでクオリティの高い話が聞けるっていうのは確かです。最初のおじいちゃんおばあちゃんから聞き出した知識で、どんどん自分が頷ける回数が増えてきたことがそれを物語っているのです。本編の人たちに聞く前には、最低限の知識と、何を聞こうということだけはリストにして行っています。誘導っぽい質問をしたことが一度だけあるんですよ。「それは楽しかったですよね」って言うてみたんです。けど、相手の人は「んー…」って。これ以上僕は嫌だなあって。そこから



はぶっちゃけて「実は、そういう時は楽しいって思うのかなって僕は思ったんですよ」と、そこからはお互い一対一の会話。「僕はこう思うんですよ、あなたはどうか」…やっぱり普通の会話、世間話をする中で聞いた話はいくつかあったんじゃないかなと思う。

>表現にしてもそうだけど、話し言葉そのままとか方言とか口癖とか、話し手のカラーや生き様が見える。…それはもっさんのスタイル？

書く上では、その人しか言わなそうな言葉はそのまま残すようにしました。それが繰り返しか、読む人に読みづらいものでも、できるだけ残す。和田さんは実際聞いていないので赤で直すんですが、「それはだめです」って阻止するのが僕の役目。もちろん読む人の気持ちも加味した上で、なるべく。実際に話を聞いて、「この言葉はすごくイメージがしやすいな」という言葉、例えば「えっちら、おっちら」という言葉っていうのは、吉岡さん特有の言い方だと思うし。そういうのは残すようにした。

言葉を選ぶとき、僕が「あ！」と思った言葉を載せるようにしていた。例えば河村さんの「それはやっぱり自分の生まれた場所だしね。ここから逃げたらどうしようもない。ははは。」本人には当たり前のことだと思うんです。でも僕にとっては「おー！」って思った言葉で。

>分かる、分かる、印象に残ってて話のくだりも憶えてる。言葉の選び方が的を射ている。

実際「寄って吞んで」っていう言葉はみんなもウケたくらい、この編集会議で。「この本のタイトル、何にしようか」って、俺が「寄って吞んで？」って言ったんだけど、「それいいんだけど…吞んで、がねえ」ってなって、これは飲み会のタイトルにしようかって。これもすごい言葉だし。

>一回しか読んでないんだけど、今聞いている言葉それぞれどんなシーンで出てたのか憶えているくらいだから、その人のカラーが、表情まで浮かんでくるような印象がある。

鹿毛さんは…擬音語が多いんです。「ポンポン…」とか。

>シーンが想像に浮かぶ。当時って写真もそうだけどモノクロの記憶、それが擬音語とかその人の独特の言葉で色味を帯びていく。1つの章が終わると、その人の人生ができ上がってしまう印象。

>後半のところで、高校生がお年寄りのお話を聞く企画の趣旨、意図は？

島根県の協働事業の審査員の吉田さん（山陰合同銀行）が、子どもたちにも聞き書きをやらせるという僕たちの提案に共感してくれてぜひやって欲しいって言われたんで、じゃあしっかりやろうって、和田さんと言って。僕自身も、普段接することのない年齢の人たちに出会うことで刺激とか充実感が得られるというのを実感していたので、それを高校生にも感じてもらえたらなと。作品をしあげる



ことがこの子らにとって意味があるというよりも、出会いに行くこと自体がイベント的に意味があるだろうと、やる前から思っていました。

>行った子たちの感想、反応は？

僕と高校生2人と此下さんと4人で話をしたおばあちゃんがとても可愛らしい人で、顔とか雰囲気とか、90歳とは思えないお若い感じだと僕も思っていたんですけど、帰りの車の後部座席でそれまで「嵐」の話しかしてなかった高校生たち2人が「本当、可愛らしいおばあちゃんだったがあ」「あんなおばあちゃんになりたい」って。ああ、これは録音しておきたかったって思うくらい嬉しかったなあ。此下さんが最後に「いやぁ懐かしいわ。そがな話したらああだったなあ…」って。ほんと

これなんです。聞く人がいれば話すんですけど。

>やっぱり、私たち世代含めて若い子たちがお年寄りの話を「聞く」だけじゃなくて「残して伝える」っていうところに改めて意義があるなあと思うんですけど。

その答えは、この本に載っている人たちが亡くなった後とか、それくらいにならないとわからないんじゃないですかね。逆に僕たちがここに載せている写真でも、ここに写っている人たちも撮影した人も亡くなってる方が多いと思う。こうやってここに出てきてようやく日の目をみたというか。それと一緒に、70年後にこれを、石見銀山の昔の話を研究している人が見たら、その時僕らがこれをやった意義が出てくる。記録にする、残すって意味ではある。70年後の人たちはこれだけの情報をもう得られないですよ。だってみんな死んでいるんだもん。そう思うと、案外記録することも馬鹿にならない…。

>今あるものの価値ってなんだろう。何十年後かに価値って見直されるものだけど、今目の前にあるものにも価値があるわけで、文化にも人にも。それってどうやって見出したらいんだろう？

「こういう些細なことが宝物だ」って、おじいちゃん達はわかっているけど、私たち若造は…？

この本に載っていることって普通の生活じゃない？それを集めて1冊の本にできることって凄い。

今を大切にするためには欲張らないこと。今ここにいるはずなのに遠くのものに価値を感じるのは、意識が欲張って未来にいつちゃうからですよ。目標がないと人間は生きづらいと思うんです。だけど、目標が高すぎたり、すごい欲張りな目標だったりすると、やっぱり今を大切にできませんよね。バランスが崩れている人が多い。

>大森の人たちってそんなに欲張らない生活かな？ 普通の生活をして、身近な地元のために何か自分にできることを考えている。だからこの町に暮らすんだとか。

松本さんの「未来予想図」は、結局はこの町に人を残すことなんです。誰もロープウェイとか空港とがすごいですよね！じゃないんですよ。自慢できるのは遺跡であって、ロープウェイとかではない。欲張っちゃうといずれ見失うじゃないですか。本質は見失っていない。

>1冊目、2冊目は、本宮さん自身の成長の過程、証にもなっているんだ。

確かに、年々成長させてもらっている感じがします。育てられている感覚。僕、20歳くらいから止まってた感じがするんです。だから大田に来て、本当に人と接する機会を得て成長している、育てられている。最初は不信感から始まり、人を信じるってこんなことか、認められるってこんなことか、生きていくには信用が必要なんだ、仕事ってこういう風にしても成り立つんだって。

大田は何でもあると思います。保守的な雰囲気

気、ダメ出しをしているところですら何かある。それさえ良くすれば。何かあるんじゃないかな、大田も。

>一人のおじいちゃんのお話から話が膨らんで、まちの財産になるようなまちだから。

ちなみに、この本には「世界遺産」という言葉が出てこない。世界遺産めがけて世界遺産になったんじゃないんです。この人たちの活動って目標めがけていったんじゃない。自分たちが当たり前だと、その時にできることを足元からやっていって気づいたら積み重なっていた。下地がなければ世界遺産にならなかった。だから世界遺産を意識して欲しくなかった。

今、好きなことをやりたいと言っている人がいっぱいいる。僕も好きなことや夢があって、哲学的なこととかを考えたり、人に話を聞いたりしているから、だから僕は臨床心理士になりたいなあって。憧れっていうのはすごくいいことですけど、憧れは達成しない方がいいと思うんです、達成しちゃうと多分人は動けなくなる。だからこういう無理のない活動が人間的で素敵なことなんじゃないかなって思う。

>もっさんが公民館に勤めることを決意したのは？

僕は、大田に来た時から、ずっと聞き書きはしたいという思いはありましたが、人の集まる場所がない。逆に孤立してしまう人が多いのは、所属する場所がないからだと思っていて、その居場所づくりを自分も NPO 活動

するならやりたいという気持ちがずっとあったんですよ。だから、ゆきみーる（NPO 緑と水の連絡会議）の活動はすごく好きで、こういう居場所を設けていることがすごいし、ホットスペースもすごいし、色々な人が来て色々な人が交流するという理念はすごい賛成。これが古民家だったら見た目とか雰囲気とかももっといいけど。

そんな矢先に、中央公民館の地域リーダーの活動に参加したら、そこは普段会えない人たちばかりじゃないですか。いいなあって。ここがまた僕のひとつの居場所になったわあって思って、刺激にもなって。そのキッカケが、自分が最初ダサイと思っていた「子育てかるた」。途中から一生懸命になったということは、人が集まるきっかけというのは何でもいいんだと思ったら、公民館もやろうとしていることは一緒だろうと。そこはこだわる必要はないのかなって。人が交流するとか、それによって人が啓発されたり視野が広がったり、何かを学んだりしていく場所を提供するというのは、案外モチベーションが上げられるのかもしれないと思って。新しい風を吹き込むって、自分が必要とされていること、求められていることも分かりやすく思えてきて。じゃあできることをやれるかな、って。頑張んなきゃいけないな（苦笑）。

>そこに至るまでにはここの NPO（緑と水の連絡会議）での経験？どのくらい？

1年8カ月。国際ワークキャンプ、三瓶山の草原再生、ふろしき山・里山バイオマスの活用とか、ホットスペース支援員、がんサロンに参加したり、七色館の手伝いや NPO 読本

のライターもやって、あそびたいがぁ～（大田市生涯学習広報誌）の取材とか、色々やりましたね。

+

>話を聞いていると「食わず嫌いかな」って思ってしまうけど、実際にやってみたらはまって一生懸命やっちゃうタイプじゃない？意外にこの人、社会に溶け込んじゃうタイプ？

言われて気づいたんですけど、僕はたぶん期待をしていない方が楽しめる人なのかもしれない。結局刺激を求めている。刺激って期待をしていないところに出てくるじゃないですか。期待していないからこそ出てくる。研究大会の時に、最後の感想で「気負いなくひょっこりどっかに行って、案外楽しかったって活動を僕はこれからもやっていきたいです」って。それは期待をしないで気負いなく参加したり取り組むっていうことがいいんじゃないかなって。スリルを求めているんですよ、僕は。

>この本の一番の成果って何だと思う？ 自分にとって、このまちにとって。

今回できる本に関して一番の成果は、やっぱり記録だったのかなって思います。大森の世界遺産登録の前の主体的な遺跡保護活動の姿って感じかな。それをみんなに知らせる、知ってもらおうというのが世の中に対して予測される成果。

僕にとっての成果は、自分の言葉が

ここで発信できたこと。和田さんとの校正のやりとりで、「これもっと書いて」とか。若槻さんが読んでくれて「ここおもしろいね」って反応してくれたりとか。高橋理事長が「もっちゃんの言葉で書いてくれて」って喜んでくれて。と考えると、逆に僕は自分の気持ちを人に言ってなかったんだな、特に大田市の人には。それで、ここで言葉を発信することで、周りの人に反応をもらえたっていうのは、僕にとってやってよかったと思えることでしたね、これを作り上げたことは。

>ひとりひとりの点と点、小さなまちの中のまだ目に見えていない星を繋いだという大きな役目を果たしたんじゃない？

ひとつのテーマに沿っているんだけど、その人たちの生き方はそれぞれで、それが繋がっていて、全然違う話なんだけど、今までおぼろげだった大森のまちが「すごいパワーのあ



るまちなんだな」って気づかせてくれた本だったんだけど。

あまりにも僕が素でまとめていて、自分に嘘をついていないからかも。誰かに知らしめてやるっていう狙いはない。

>田舎は素直っていうけど、この本の中の本宮さんは素直。「知らなかったことが知れて感動！」っていう思いが時折言葉にのっている。すごい衝撃だーとか、言葉で素直に書いてある。読み手も素直に感じる。

和田さんもそれは言ってる。「これはもっちゃんが本当に素直にまとめた本なんだよね」って。それをお金を出して買ってもらうにはねえ…っていう意味なんですけど。

>本宮さんもセミプロだから…もっと出てもいいんじゃないかなー。でも、これからが楽しみですですね、成果がフィードバックで返ってくる。
この仕事をして、自分の中で変わったもの、逆に変わらないものは？

自分の感じているものや価値観で生きている人はいるんだって。

例えば、俊郎さんは逆境の人なんですよ。逆境を力に変えられる人。逆境だからここまでできた人。たぶん、僕もそうだなって。たぶん今逆境に身を置くことを恐れていると思うんですけど、俺も逆境の中でこそ力を出せる人と気づかせてもらったし。

登美さんは、常に楽しんでやっている。インタビューに行く前にこの人の本を読んで行ったんですよ。「山間で起業…」みたいな。あれ

読んだ時に、多分この人ってそれこそ大きな目標をもってやっていないんじゃないかなって。その時その時楽しいこと、自分があるべきこと、こうしたいんだっていうものに従ってるんじゃないかなって。それを登美さんに「目標をもって作業すると言うより、その時楽しいことをやってきて今に至ったってタイプじゃないですか？」って聞いたら、笑顔で「そうです」って。その時、「あ、その生き方でいいんだ」って。僕はずっと目標を持って生きなきゃって言われてきて、本当にそうかな？って。でもそういう風にして（楽しいことをやってきて）生きている人もいるんだって思ってたし、そういう風に思えたことが変わったことだし、逆に言うとその価値観とか考え方は今も変わらない。

>それは、出会った人の数だけでもっさんは成長しているわけだね？8人と出会って8つの学びがあって。

「僕は欲しいですね、そういう場が…」って松本さんの章で書きましたけど。本音を出し合って共感したりとか闘ったりとか。

>最後に。製作過程では聞き手でしたが、話し手になった気分は？

これがどうまとめられるかわからない、どうなるんだろう、大丈夫かなって思います。でもやっぱり人の話って人それぞれだから、僕の話は抽象的なことが多いけど、それぞれ面白味があって、好き嫌いがあって、それはそれでいいんじゃないかな。これも色とりどりですけど。

書籍『銀のまちをつくった人たちの話』とこの冊子は、竹 100%の紙（中越パルプ工業株式会社 鹿児島）を使って製本しています。ここでの製紙原料には、2012 年 9 月に石見銀山の「大久保石見守長保逆修墓」の周辺に拡大するモウソウチクを私たち NPO 法人緑と水の連絡会議が伐採したものも活用されています。

書籍購入のお申込み・お問合せ先 NPO 法人緑と水の連絡会議

TEL : 0854-82-2727 FAX : 0854-84-0262

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 3 7 6-1